

バイオ創薬の基盤強化に向けた 製造・品質管理の技術革新と国際貢献

オーガナイザー

豊島聡 (バイオロジクス研究トレセン)
石井明子 (国衛研)

抗体医薬品をはじめとするバイオ医薬品は、癌や自己免疫疾患の治療薬として疾病治療に不可欠な存在となっている。この1年あまり社会が翻弄されてきた新型コロナウイルス感染症に対しても、有望な中和抗体等の開発が報告され、早期の実用化に期待がかかるところである。

しかし、開発が先行する多くの製品は海外で開発・製造されていることから、早期からの安定的な供給を実現し、

国際的にも貢献していくため、医薬品製造の国内基盤整備が求められている。本シンポジウムでは、バイオ創薬の基盤強化に向けた国内の最新動向として、AMED次世代治療・診断実現のための創薬基盤技術開発事業「バイオ医薬品の高度製造技術の開発」研究班での成果を中心に、連続生産等の新しい製造技術開発とそれを支える分析技術やレギュラトリーサイエンス、さらにバイオ医薬品製造・品質管理に関する国内での技術開発や人材育成に関わる特色のある活動について紹介し、日本から海外への貢献を含め、今後の方向性を議論したい。

(石井明子)

カロテノイド研究に対する薬学からのアプローチ

オーガナイザー

石本憲司 (阪大院薬)
藤田隆司 (立命館大薬)

カロテノイドは、植物や動物等に存在する天然色素である。これまでに700種類以上同定されており、水に溶けにくく油脂に溶ける性質を有する。産業界において、主に着色用の食品添加物として利用されてきたが、抗酸化作用やビタミンAの前駆体としての役割を有することから、健康食品やサプリメントなど、様々な領域において開発研究が行われてきた。

その結果、ヒトの健康に有益となる多くの新たな生理作用を有しているこ

とが明らかになってきた。具体的にはカロテノイドによる癌や運動器疾患に対する予防効果、カロテノイド代謝物による代謝性疾患やアトピー性皮膚炎の改善効果などが報告され、古くて新しい機能性素材として様々な方面から注目されている。

本シンポジウムでは、これらカロテノイドの新たな生理作用やその生理作用を十分に発揮させるために消化管吸収性を向上させる製剤技術など、カロテノイドの新たな利用に関するトピックについて講演していただき、今後のカロテノイド研究に対する薬学領域の役割について議論する。

(石本憲司)

地域医療薬学の実践 —Pharmacist is anywhere

オーガナイザー

川上美好 (北里大薬)
笠師久美子 (北医療大薬)

日本では2025年をメドに、可能な限り住み慣れた地域で、その有する能力に応じ自立した生活を続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を目指している。

その中で近年、地域における薬剤師の活動は、ますます広がりを見せている。かかりつけ薬局・薬剤師、健康サポート薬局と共に、地域の薬剤師の職域は、薬局内での処方箋調剤、セルフ

メディケーションの支援から、地域住民の疾病予防・健康増進、患者宅での在宅医療、地域多職種との連携など、地域のあらゆる場所において活躍の場が拡大している。

今回のシンポジウムの目的は、地域での薬剤師の役割の拡充のために、今後有用と考えられる各種情報を提供することにある。今回は米国、日本、オーストラリアの薬剤師が、各国の地域における薬剤師の現状の活躍と取り組み、今後の展望について講演する。

今後の日本における地域医療薬学拡大に向けて、新たな可能性を考えていきたいと考える。

(川上美好)

薬学の伝統を継承するファルマシアが 薬学の将来を語る

オーガナイザー

松沢厚 (東北大院薬)
坂本謙司 (帝京大薬)
太田公規 (昭和大薬)

日本薬学会機関誌「ファルマシア」では、1965年の創刊以降、薬学に関する研究から薬剤師の実務、さらには薬学教育まで幅広く最新の情報を発信してきた。そして、創刊号の巻頭言「オクテット」には、宮木高明初代編集委員長から「われら会員がこの薬学に関して、より良く知り、より深く考え合うためには、ファルマシアを役立たせようではないか」と、ファルマシアを通じた日本薬学会の活性化への期待が述べられている。

べられている。

現在の成熟した日本薬学会のさらなる活性化には、会員の研鑽と会員同士のつながりが重要であり、ファルマシアはそれらを十分に支援する必要がある。

本シンポジウムは、日本薬学会会員であるファルマシアの読者が本誌の内容をより深く理解し、会員同士のつながりが緊密になることで、薬学が大きく発展する契機となることを期待して企画した。

各コラムの紹介のみならず、歴代の編集委員や読者からの声を交えながらファルマシアの本当の面白さを紹介する。(太田公規)

フォルダマーの魅力 —基礎から材料・創薬研究へ

オーガナイザー

大庭誠 (京都府立医大)
出水庸介 (国衛研)
臼井一晃 (昭和大薬)

1996年にGellman教授(米国ウィスコンシン大学)によって名付けられた規則的な一定の二次または三次構造をとる人工オリゴマー分子“フォルダマー”。それから20年以上が経過し、様々なタイプのフォルダマーが開発され、そのユニークな構造特性が明らかにされている。また、機能化に向けた

研究も精力的に行われており、ケミカルバイオロジー研究のツールや医薬品候補としても期待されている。

本シンポジウムでは、シンポジストとして薬学系・非薬学系の先生をバランス良くお迎えし、多岐にわたる切り口からフォルダマーの魅力に迫る。

すなわち、核酸・ペプチド・人工らせん分子など異なる分子を構成要素とし、基礎研究から材料や創薬への応用研究まで広義の機能化に向けたフォルダマーの可能性について議論する。

(大庭誠)

第5回病院薬剤師が実践するリバーストランス レーショナルリサーチの最前線

—臨床情報を突破口とした創薬・育薬研究

オーガナイザー

増田智先 (国際医療福祉大病院薬)
伊東弘樹 (大分大病院薬)
池田龍二 (宮崎大病院薬)
城野博史 (熊本大病院薬)

近年の目覚ましい科学技術の進歩に伴い、多様な臨床情報の取得が可能となり、治療標的分子の同定およびその機能を制御する分子標的薬が実臨床で大きな成果を生み出しつつある。

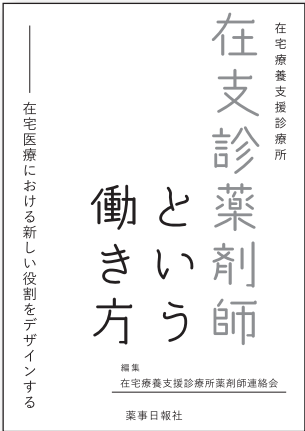
一方、実地診療の最前線においては、限られた臨床試験で集積されたエビデンスだけでは解決できない症例も多く

存在し、臨床経験を兼ね備えた薬剤師自らが試行錯誤を繰り返しながら、新たなエビデンスを創出することも求められている。

本シンポジウムでは、臨床と基礎の双方にチャンネルを有し、最先端の技術基盤に基づいたエビデンス創出を目指す薬剤師の創薬・育薬研究について、臨床薬剤師ならではの着眼点、いち早く臨床に還元し得る環境を活かした研究活動の意義と重要性についてご紹介いただき、病院薬剤師が取り組む研究の現状、問題点、今後の展開について考えたい。(城野博史)

●病院薬剤師でも、薬局薬剤師でもない 新たな薬剤師としての姿を知る！

『在宅療養支援診療所(在支診)』に所属する9人の薬剤師が、どのように業務をデザインして、どのような役割を担っているのか、その実際の取り組みと、今後何を目指すのかについて紹介。また、在支診の院長が、医師として、そして経営者として薬剤師を雇用している目的や期待することなども紹介。



●「患者さんと地域の状況と情報の統合」に 取り組む在支診薬剤師の実態を知ること は「モノ」から「ヒト」へのヒントにもなる！

【目次】

- 第1部 在宅医・経営者が求める薬剤師とは？
- 第2部 在支診薬剤師業務の最前線～そして未来に向け
- 第3部 座談会
在支診薬剤師という働き方
—“地域”を結び、在宅医療を支える挑戦—

在支診薬剤師という働き方

—在宅医療における新しい役割をデザインする

【編集】在宅療養支援診療所薬剤師連絡会
A5判/142頁/定価2,200円(本体2,000円+税10%)



詳細・購入は
コチラ

薬事日報社 書籍のご注文は、オンラインショップ(<https://yakuji-shop.jp/>)または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。